

## 熊本地震で「道の駅」が防災拠点として果たした役割

杉崎 光義

全国「道の駅」連絡会事務局長

### はじめに

近年、地震、ゲリラ豪雨等による自然災害が多発している。その中において「道の駅」は、被災者の一時避難場所や復旧支援の前線基地といった防災拠点としての役割を担ってきた。

「道の駅」が防災拠点として活用されたのは、平成16年に発生した新潟県中越地震時である。そして東日本大震災時においても、同様な役割を担ったことから、近年、災害時における「道の駅」の活用についての期待が大きい。

そのため本稿では、大規模な土砂崩落や道路の損壊等が報告されている「熊本地震」における「道の駅」が防災拠点として果たした役割について紹介する。



図1 被災した道の駅の位置図

の区間で通行不能となった。

そのなかで、熊本県内の「道の駅」6駅（28駅中）において雨漏り、壁にひびが入る等の被害を受けたものの、4月26日から熊本県内の全ての駅で営業を再開している。

### 3 過去の災害時における「道の駅」の果たした役割

過去の災害時において「道の駅」は、防災拠点としての役割を担っている。

平成16年の新潟県中越地震、平成23年の東日本大震災時には、道路利用者や近隣住民の一次的な避難場所、道路情報・避難所情報等の提供、飲食品の無料配布、炊き出し、温泉施設の無料開放、支援物資の集配基地、自衛隊の前線基地や消防、警察の搜索拠点、救援物資や災害復旧車両の中継地として機能している。

そして過去の災害時の経験から「道の駅」に求められる役割は、災害発生から時間の経過に伴い変化することが把握されている。

### 2 熊本地震の発生

平成28年4月14日、16日、熊本県を震源とする、M6.5、M7.3の強い地震が2度発生、強い揺れが何度も起きたことで、住宅への被害や土砂崩れなどの地盤災害に伴う被害が数多く発生した。

道路については、南阿蘇村にある全長約200メートルの阿蘇大橋が土砂崩れで崩落したほか、生活道路の多くが寸断される等、高速道路をはじめ、国道、県道等多く

表1 熊本地震によって被災した道の駅

駅名	被災内容(4/16本震後)
道の駅大津	断水(トイレ利用不可)
道の駅阿蘇	断水(トイレ利用不可) 停電
道の駅あそ望の郷くぎの	断水(湧水使い、トイレ使用化) 停電
道の駅旭志	天井の梁が落下
道の駅不知火	天井板の剥がれ
道の駅通潤橋	駐車場のひび割れ



写真1 中越地震において避難場所として活用される道の駅



写真2 東日本大震災において自衛隊の前線基地として活用される道の駅

具体的には、災害発生直後では、緊急避難対応（避難場所の提供、飲食品の提供、炊き出し）としての役割が求められ、その後、道路の復旧など交通インフラが回復するに伴い、災害復旧対応（前線・中継基地、支援物資の集積地）へと変化する。さらに、ある一定の期間（4日程度）経過した後では、災害復興支援（地域の生活復興支援（地域振興施設の再開））のための役割へと変化していく。

## 4 熊本地震において「道の駅」が果たした役割

まず、熊本地震においても「道の駅」は、既に確認されている役割である一時避難場所として利用された。なかでも道の駅「あそ望の郷くぎの」では、広い駐車場、敷地があることや、アウトドアショップが隣接していたことから、避難者へのテント、寝袋等の貸し出しが行われ、敷地内に約30張のテントが避難場所として活用された。なお、熊本地震では余震が頻繁に続いたことから、

広い駐車場、24時間トイレが使える「道の駅」は、車中泊の場所としての利用がなされた。



写真3 道の駅「竜北」駐車場の夜間



写真4 道の駅「大津」駐車場の夜間の状況

そして今回も被災者に対して、「道の駅」で販売していた商品や飲食品、日用生活用品等の無料配布や炊き出しが行われた。



写真5 道の駅「あそ望の郷くぎの」では、電気復旧後、近くの避難場所に「パン」、「おにぎり」等を提供した。

また、被災地に近い「道の駅」は、自衛隊の被災地救援の前線基地や国土交通省緊急災害対策派遣隊（TECFORCE）の災害対策本部の設置、被災地へ向かう支援車両、緊急車両の中継基地として幅広く活用された。

今回も土砂崩れで道路が寸断され通行止めが多く発生



写真6 被災後、道の駅「大津」では、テナント会社社長の発意から、1200食分の炊き出し（豚汁・御飯：1000食、豚汁200食）を実施。



写真7 被災地に近く、広い駐車場があった「道の駅」菊水に国土交通省緊急災害対策派遣隊（TECFORCE）の災害対策本部を設置。

した。そのため、道路情報を求める内外の人々に対して、手書き地図等の配布、掲示やSNS等に道路情報（通行止め、通行可能な道路の情報）の掲載を行う等、道路情報等の発信拠点として機能した。

なかでも SNS や地域 FM を活用した被災地域内外への情報発信は、スマートフォンの普及等により、迅速に情報伝達が行われた。



図2 道の駅「小国」の Facebook

## 5 最後に～防災拠点として「道の駅」の更なる活躍のための提案～

今回、被災地支援として、他地域の「道の駅」が被災地の「道の駅」支援にかけつけるという、「道の駅」同士の連携が行われた。具体的には、被災地において流通がストップしたことにより、必要な飲料水、トイレ紙、オムツ・生理用品等の商品が不足したため、九州・沖縄「道の駅」ネットワークをはじめ、道の駅「せせらぎの里こうら（滋賀県）」より、ペットボトル飲料やオムツ、生理用品等の支援物資の提供が行われる等、「道の駅」同士の相互支援が行われた。

また、道路の通行情報の案内において別府方面の通行情報は、道の駅「ゆふいん」で、福岡・熊本方面の通行情報は、道の駅「小国」で案内する、といった情報提供方針について「道の駅」相互での連携が図られた。

このほか道の駅「せせらぎの里 こうら（滋賀県）」から、道の駅「大津」に対して、100万円分の商品注文が行われる等、「道の駅」同士の相互支援も行われた。今回、熊本地震においても「道の駅」が果たした役割は大きく、今後ますます「道の駅」が防災拠点として活躍していくためには、防災設備の充実とあわせて、「道の駅」相互の連携体制の構築等が重要と考える。

	避難場所の提供	トイレの提供	情報の提供	物資の提供	炊き出しの提供	支援基地の設置	関係組織との連携	備考
中越地震	●		●	●		●		仮設住宅の建設
東日本大震災	●	●	●	●	●	●	●	
熊本地震	●	●	●	●	●	●	●	



具体的には、地域防災計画等における「道の駅」の防災拠点としての指定や自治体や周辺「道の駅」との相互連携・支援のための災害時協定の締結が挙げられる。

全国「道の駅」連絡会としては、災害時「道の駅」が防災拠点として活躍するよう、今後とも情報発信等を通じて支援していきたいと考えている。